

広韻・韻鏡データベース

住谷芳幸

文化創造学部文化創造学科

(2005年11月9日受理)

Koin・Inkyo Database

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SUMIYA Yoshiyuki

(Received November 9 , 2005)

1 はじめに

中国中古音を知るための基礎的な資料は陸法言の『切韻』(601年)であろう。しかし、『切韻』は現存せず、そのため切韻系韻書の最終的な増補改訂版である『大宗重修広韻』(1008年、以下では『広韻』とする)が利用されることが多い。韻書である『広韻』では、漢字の音は反切により示される。この反切を系聯することで、中国中古音の枠組みを知ることができる。ただし、反切系聯法によって知ることのできる音の枠組みは、漢字相互の相対的な関係であり、具体的な音ではない。具体的な音を知るために『韻鏡』などの韻図が利用される。数年来、この『広韻』・『韻鏡』をコンピュータ上で利用可能にするため、そのデータ化を行ってきた。その成果として、1997年にBTRON用のデータをインターネット上で公開した(<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/data.htm>)。「JIS X0208・0212」の全漢字につき、その『広韻』での頁・行・反切番号等を知るためのデータである「広韻索引/T版」、および『広韻』のすべての反切に、反切番号を付し、『韻鏡』での位置を加えたデータである「広韻反切并韻鏡/T版」がそれで

ある。さらに、これらのデータから「JIS X0208」の部分抜き出したシフトJIS用のデータである「広韻索引/S版」・「広韻反切并韻鏡/S版」もあわせて公開した。『広韻』の序文では、その収録語数を26094字とする。しかしながら、上記のデータでは扱える文字の制約のため、その一部を扱ったに過ぎない。これらのデータの公開から数年を経て、BTRONも超漢字となり、対応する文字数も多くなったことから、上記のデータも改定した。さらに、今回は「広韻索引」「広韻反切并韻鏡」を併合し、名称も「広韻・韻鏡データベース」と変更して公開することとした。

2 広韻・韻鏡データベース

「広韻・韻鏡データベース」は超漢字付属のマイクロカードを用いて作成した。「広韻・韻鏡データベース」は次の様に設計されている。

項目名	: データの種類
漢字	: 文字
頁	: 数値
行	: 数値

行内番号	: 数値
韻目	: 文字
韻目順	: 数値
小韻順	: 数値
反切	: 文字
反切(校勘前)	: 文字
上字	: 文字
下字	: 文字
上字(校勘前)	: 文字
下字(校勘前)	: 文字
転	: 数値
七音	: 文字
七音(数値)	: 数値
四声	: 数値
等位	: 数値
小韻番号	: 数値
備考	: 文字

2.1 漢字

「漢字」の項目は、『広韻』で掲出された漢字をその掲出順に並べたものである。同一の漢字が複数の場所に掲出される場合は、それぞれの掲出位置に並べてある。また、この項目では TRON コード 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いている。ただし、字体の問題で大漢和辞典収録文字以外の文字を用いた部分が 8 字(異なり語数)ある。また、ふさわしい文字がないために 2 字の合字で表現した文字が 22 字(異なり語数)ある。なお、合字は次のように用いている。

[女圭] は 娃 を表す
 {亞土} は 聖 を表す

また、『広韻』としては『校正宋本廣韻』(藝文印書館)を用いた。『校正宋本廣韻』には、周祖謨『廣韻校勘記』(商務印書館、以下では『校勘記』とする)での校勘も欄外に記載されているが、この『校勘記』記載の漢字も採っ

てある。この場合、その漢字が『校勘記』記載の漢字であることを示すため、漢字の後に「(校勘)」と入れた。なお、この「校勘」の文字は TRON コード 1 面の JIS 第一水準・第二水準相当文字を用いた(以下同じ)。『広韻』掲出の漢字と『校勘記』記載の漢字とがともに大漢和辞典収録文字である場合、すなわちともに超漢字で表示可能な漢字である場合、「漢字」の項目以外は全く同じデータとなる。『校勘記』記載の漢字が大漢和辞典収録文字であり、『広韻』掲出の漢字が大漢和辞典収録文字でない場合は、その違いを「備考」の項目に注記するのみで、『広韻』掲出の漢字を合字等で表現することはしていない。『広韻』掲出の漢字が大漢和辞典収録文字でなく、また『校勘記』にも記載がないため、私に決定した漢字が 42 字(異なり語数)ある。このような場合、漢字の後に「(校)」と入れた。なお、この「校」の文字も TRON コード 1 面の JIS 第一水準・第二水準相当文字を用いた。

2.2 頁

「頁」の項目は、「漢字」の項目に示された漢字の『校正宋本廣韻』での掲出位置の頁数である(22から546まで)。なお、ここでは『校正宋本廣韻』での頁数を使用した。張氏澤存堂本であれば、この頁数を加減することで、他の『広韻』でも利用可能である。

2.3 行

「行」の項目は、『校正宋本廣韻』での掲出位置の行数である(1から10まで)。

2.4 行内番号

「行内番号」の項目は、『校正宋本廣韻』の各行での掲出順を数値で示したものである。『広韻』での注文中に「又作」等として異体

字の注記が含まれる場合がある。その場合、「又作」等の注記を含む漢字の「行内番号」の数値に小数点以下1・2・3を加えて、例えば「3.1」「3.2」「3.3」として、その異体字の位置を示した。また、注文中に「又音」「又切」として別音を示すものの、その音を示す小韻中にその漢字が含まれていない場合がある。この場合、その小韻末尾の漢字の「行内番号」の数値に小数点以下4・5・6を加えて、例えば「5.4」「5.5」「5.6」として、その別音の漢字を追加した。同じく、注文中に「又音」「又切」として別音を示すものの、その別音の小韻自体がない場合もある。この場合、その小韻が含まれるべき韻の末尾の漢字の「行内番号」の数値に小数点以下7・8・9を加えて、例えば「7.7」「7.8」「7.9」のように示し、新たな小韻として追加した。また、『校勘記』では442頁5行第3字「駝」の後に、「忱」を追加している。そのため、この「忱」の「行内番号」を「3.01」として特別に扱った。

2.5 韻目

「韻目」の項目は、『広韻』での韻目である。

2.6 韻目順

「韻目順」の項目は、『広韻』で「東第一」のように各韻目に付された数字を数値で示した。

2.7 小韻順

「小韻順」の項目は、各韻での小韻の順序を1からの連続した数値で示したものである。この「小韻順」は新たな小韻として末尾に追加した漢字にも付されている。

2.8 反切

「反切」の項目は、『広韻』の各小韻の代表字に付された反切である。ここでもTRONコード8面・9面の大漢和辞典収録文字を用いている。『校勘記』に記載のある反切については、『校勘記』記載の反切であることを示すため、反切の後に「(校勘)」と入れた。なお、「又切」の場合は、その反切を用いた。「又音」の場合は、備考にその音を示し、「反切」の項目にはデータが入っていない。

2.9 反切(校勘前)

「反切(校勘前)」の項目は、「反切」の項目が『校勘記』記載の反切の場合に、『広韻』で記載されているもとの反切を示した。

2.10 上字・下字

「上字」「下字」の項目は、「反切」の項目を上字と下字とに分けて示したものである。なお、『校勘記』記載の反切に付した「(校勘)」はここで付していない。

2.11 上字(校勘前)・下字(校勘前)

「上字(校勘前)」「下字(校勘前)」は、「反切(校勘前)」の項目を上字と下字とに分けて示したものである。

2.12 転

「転」の項目は、『広韻』の各小韻の代表字の『韻鏡』での転次である(1から43まで)。なお、『広韻』での反切に従い『韻鏡』での位置を決めた場合があるため、実際の『韻鏡』で示されている漢字の位置とは異なるものもある。また、『広韻』の各巻末尾に「新添類隔今更音和切」として掲出された漢字については、「漢字」「頁」「行」「行内番号」「反切」「上字」「下字」の項目は採録したが、『韻鏡』で

の位置付けはしていない。

2.13 七音

「七音」の項目は、『韻鏡』での縦の行を、馬淵和夫『韻鏡校本と廣韻索引(日本學術振興會)』に従い、片仮名で示した(口からウまで)。

2.14 七音(数値)

「七音(数値)」の項目は、「七音」の項目をイロ八順に並べるためのものである(1から23まで)。

2.15 四声

「四声」の項目は、『韻鏡』での横の段を『韻鏡校本と廣韻索引』に従い、数値で示した(1から16まで)。なお、『廣韻』の小韻のなかには、他の小韻と同音であり、『韻鏡』上で重複する位置となる場合がある。また、同音ではないもの韻図の性質上、『韻鏡』上で重複する位置となる場合もある。このような場合、重複した漢字には「四声」の数値に小数点以下1・2を加えて、例えば「8.1」「8.2」のように示した。

2.16 等位

「等位」の項目は、『韻鏡』での等位を数値で示した。(1から4まで)。「四声」が小数点以下を含む場合であっても、ここでは1から4までの整数で示した。

2.17 小韻番号

「小韻番号」の項目は『廣韻』での各小韻の代表字に対し、その出現順に1からの連続した番号を付した(1から3874まで)。この「小韻番号」は「廣韻索引」・「廣韻反切并韻鏡」では「反切番号」としていたが、「又音」「又切」として各小韻に追加された項目に

は、反切のないもの、代表字の反切とは異なるものがあるため、「小韻番号」と変更した。なお、『廣韻』の各巻末尾に「新添類隔今更音和切」として掲出された反切については、「小韻番号(これは「反切番号」がふさわしい)として4001からの連続した番号を付した(4001から4021まで)。さらに、各韻末尾の「行内番号」の数値に小数点以下7・8・9を加えて、新たな小韻として追加した項目については、「小韻番号(これも「反切番号」がふさわしい)として5001からの連続した番号を付した(5001から5030まで)。ところで、『校勘記』では、231頁10行第4字の「欲」の項目を、新たな小韻として独立させ、その反切を「丘凡切」としている。この項目については「小韻番号(これも「反切番号」がふさわしい)を6001とした。

2.18 備考

「備考」の項目は、「又音」「又切」として示された音、字形の注記、その他の雑多な内容を備忘として、記入したものである。削除することも考えたが、利用上多少の便があるうかと残した。

3 諸橋轍次『大漢和辞典』と周祖謨『廣韻校勘記』

以上は、『廣韻』の掲出漢字を、周祖謨『校勘記』の記載も参考として、データベース化を行ったことの報告である。データベース化にあたって、基本的には超漢字付属のTRONコード8面・9面の大漢和辞典収録文字を用いた。超漢字付属の大漢和辞典収録文字とは、諸橋轍次『大漢和辞典』(以下、『諸橋大漢和』とする)の文字を参考に作成された文字である。『諸橋大漢和』は漢和辞典であり、『校勘記』とは異なった目的で作成されたものであることは、ここで言うまでもない。また、す

で知られているように、『諸橋大漢和』には異体字・譌字等を含め、様々な文字が収録されている。そのため、『諸橋大漢和』収録文字と『校勘記』の記載には微妙な違いが見出される。例えば、上記2・17において『校勘記』では、231頁10行第4字の「欵」の項目を、新たな小韻として独立させていることを述べた。『校勘記』では、「匹凡切」の小韻に含まれる「欵」を誤りとして、『玉篇』に従い「丘凡切」とし、新たな小韻として独立させたものである。ところが、『諸橋大漢和』では、『広韻』の「匹凡切」も、『玉篇』の「丘凡切」も共に「欵」の反切として認定しているのである。『諸橋大漢和』に従うならば「欵」を新たな小韻として独立させる必要はなくなるのである。(もちろん、『玉篇』の「丘凡切」が、何故『広韻』には見出せないのかという別の問題が生じるのだが。)

以上の例は、文字に付された反切の認定に関する例であるが、文字のそのものの認定についても、『諸橋大漢和』と『校勘記』とでは、かなりの違いが見出される。『校勘記』で誤りとし、別の漢字として記載された漢字が、『諸橋大漢和』では収録されている場合がある。内容としては、雑多であり、分類が難しいのであるが、おおよそ分類すれば、次のようなものとなる。(実際に漢字の字体を示すべきであろうが、印刷の都合上、文字数のみを示す。なお、文字数は異なり字数である。また、具体的な字形については、稿を改めて報告したい。)

『校勘記』で誤りとされた文字が、『諸橋大

漢和』では

1. 『広韻』により正しい文字として収録されているもの 46字
2. 『広韻』の記載により古字等の異体字として収録されているもの 10字
3. 他書により正しい文字として収録されているもの 21字
4. 他書の記載により俗字等の異体字として収録されているもの 44字
5. その他の理由により収録されているもの 94字
6. 『校勘記』と同じく譌字として収録されているもの 24字

これらの漢字について、「広韻・韻鏡データベース」としてどのように取り扱うべきかは今後の課題となろう。

4 おわりに

以上、「広韻・韻鏡データベース」について簡単に説明してきた。このデータについてはインターネット上で公開を予定している (<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/data.htm>)。

なお、このデータを作成するにあたり、岡島昭浩氏作成の「反切解釈(広韻反切と韻鏡)」(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/ingaku/jion.htm>)を参考とした。また、工藤祐嗣氏作成の「『大宋重修広韻』データベース(大漢和包摂方式)」(<http://members.at.infoseek.co.jp/yunzukudo/download.html>)により、いくつかの誤りを訂正した。ともに、この場をかり、お礼申し上げたい。